

交じりあうフィールドから

中村安秀（なかむら・やすひで）

大阪大学大学院人間科学研究科グローバル人間学専攻国際協力学・教授



地域研究者の軌跡

- ① 生年・出身地……一九五二年、和歌山県
- ② 専門分野・地域……国際保健、インドネシア
- ③ 学歴……東京大学医学部医学科
- ④ 職歴……都立病院小児科（二五歳、一〇年）、インドネシア国際協力機構専門家（三五歳、二年）、パキスタン国連難民高等弁務官事務所（三八歳、一年）、大学病院講師（四一歳、三年）、ハーバード大学公衆衛生大学院（四五歳、一年）、大学教授（四七歳、一二年）
- ⑤ 現地滞在経験……インドネシア、パキスタン、ボストン（アメリカ合衆国）
- ⑥ 研究手法……フィールドでの生活は何ものにも変えがたい貴重な経験でした。文化、風土、人々、食事。土地の匂いそのものから多くのことを学ばせてもらいました。

- ⑦ 所属学会……日本国際保健医療学会、国際ボランティア学会、日本渡航医学会、国際開発学会など
- ⑧ 研究上の画期……阪神・淡路大震災。避難所の様子は難民キャンプのようでした。日本が第三世界になった現実を目撃したことは大きな衝撃でした。
- ⑨ 推薦図書……青山潤『アフリカによる旅』（講談社文庫、二〇〇九年）。謎の熱帯ウナギ捕獲という一点を突破口にしてアフリカの奥地に迫った理系の研究者。単なる冒険譚の域を越えて地域の姿を描き出している。

メッセージ

地域研究の枠組みに拘泥する必要はまったくないと思う。私自身でいえば、自分の研究が国際保健なのか、国際協力学なのか、地域研究なのか、答えはない。国境もボーダレスとなり、学問分野もボーダレスになっている。伝統的な学問分野の壁の内か外に気兼ねするのではなく、自分は何を研究したいのかという重要な点にこだわればいい。自分が好きだと思えば、自分が選ぼうとしている道に果敢にチャレンジしてほしい。

地域研究者とNGOとの関係を考えてみたい。畢竟、理論を研究する者と実践をめざす者は、同じ事象を見ていても感性も思考回路も導きだす結論も異なるのは当然である。学際研究では、「呉越同舟アプローチ」と呼んでいた。国際保健では、医師や看護師といった狭義の保健医療関係者だけでは人々の健康は守れないことが共通理解になりつつある。地域研究者と共同研究したいという実践者は少なくない。

一方、地域研究者には、実践を伴う研究のあり方にとまどいがあるようにみえる。戦争に利用された過去のトラウマが残っているという理由からかどうか、私にはわからない。もちろん、状況によっては、地域研究の成果を性急に実践に適用することは是非について慎重になることは当然である。しかし、国連機関に人類学の専門家が勤務し、N

GOにビジネススクール出身者が関与し、国際保健プロジェクトのリーダーに非医療者が就任する時代である。異なる専門家と交じりあい議論すること、実践者とフィールドを歩き学びあうこと、研究成果を仲間内だけでなく社会に発信することには、大きな異論はないであろう。交じりあうフィールド調査から新しい地域研究の地平が切り拓かれることを期待したい。

最後に、「研究対象社会の開発に関わると研究ではなくなる」という誤った神話について発言したい。東日本大震災では、震災前から被災地に関する研究を行っていた自然・人文科学の研究者は少なくなかった。彼らの多くは、震災後も、防災、農業、教育、文化、保健医療、高齢者、子どもといった多岐にわたる分野で復興に関わりながら、自分の研究を継続している。日本国内では当然のことが、なぜ、途上国になると研究者のスタンスが変貌してしまうのだろうか。開発に関わらなくても研究は遂行できる。まったく同様に、開発に関わっても研究は成立する。社会に対する研究者の姿勢と研究内容の質が問われているだけである。